

コメント・〈植民地近代〉をめぐる近年の研究動向について

松本武祝

御紹介いただきました松本です。コメントという役割を仰せつかりました。エッカート先生の報告といえますか、レジュメを、きょう初めて拝見したところです。全く先生の報告と関係なしにレジュメをつくったんですが、ふたを開けてみたら、全く同じような話をするようになっていて、少し驚いているところです。

エッカート先生の報告の中でも、いわゆる「植民地近代」というような新しい手法による研究のことをお話になっておられます。韓国とアメリカで同時代的に出てきたという、そういう表現があったのですけれども、そういう傾向に関しては日本も例外的ではないということを、私なりに了解したというのが第一の印象でした。

で、その印象に関連して、あることを思い出しました。先ほどご紹介のとおり、私は農業経済学の分野に所属しております。関東所在の農業経済学関係の学科や研究所の

人たちが集まって、毎年ソフトボールの大会をやっています。それで、最初にラジオ体操をやります。日本人はラジオ体操をちゃんとできるわけです。ところが留学生は何のことかわからずに、ぼんやり眺めているわけです。それで、ラジオ体操っていうのはすごいんだなと思ったのですけれど、それはまさにこれからお話しする規律権力という問題に繋がるわけです。学校教育という場をそれぞれが別個に経験することによって、お互いに全然知らない人間同士でも、ラジオ体操をみんなが一遍にできてしまう。考えたいのはそういうことです。日本人しかいないときには、それが当然のことなので、よくわからないのですが、たまたまその場に、外国人学生がいたものだから、それは非常に異様なことであるということに気がつかされる。

逆に今回は、エッカート先生とは初めてお会いするのですが、先生と文化的な背景が全く違うにもかかわらず、同

じようなことを考えることができる。ここには、別の意味で規律権力が作動している。それは、まさにアカデミズムなんです、大学教育という制度が日本にもあり、アメリカにもあり、韓国にもあり、そういう中で研究活動をする。そういう共通の物質的な基盤があるということでもって、初めて会う人間同士でも、同じようなことを考えていて、同じような研究をしていることを事後的に確認する事ができるんだ、と感じた次第です。

学校という制度があることによって、要するに、午前中のお話や、エッカート先生のお話にもあったように、いわゆる親日家であれ、対日協力者であれ、彼らは韓国の国家建設に従事していくことになるわけですから、やはり官僚としての能力を身につけていることというのが一番重要な、その物質的な基盤になっていることだろうと思います。

あるいは、午前中、一番最初にお話しになった姜徳相先生と宮田節子先生の対談の中でもあったように、植民地時代の総督府の官僚と宮田先生たち当時の学生との間に会話が成立したというのは、それは非常に幸運なことではあると思うのですけれども、しかし、他方では、植民地の官僚が大学教育を経て、官僚としてキャリアを積んできた、そのために、例えば、史実に基づく批判であれば、それはいつでも受け入れるというような態度というのは、やはり官僚としての研鑽というのか、研究というのか、そういう

バックグラウンドがあって、初めてそういう感覚が養われるというふうに理解することができるのだらうと思います。あるいは、資料を残すということが一番重要だという、そういう認識も、やはりまた学校教育や官僚としての経験の中で培われた感覚というふうに思うわけです。

きょう、私は、規律権力ということの問題にするわけですが、私も、規律権力が用意した物質的な基盤というのは、非常に重要な意味を持っているということが一番の論点です。

それで、レジュメに書いたことは、先ほども申し上げましたように、エッカート先生のお話と大部分重なるので、要点だけをまとめてしゃべります。規律権力の話と関連した、もう一つ、私の個人的な経験をご紹介します。皆様も恐らく同じだと思います。その場に行けば、同じような経験がされると思います。ソウルに西大門刑務所というのがあって、そこが今、歴史博物館になっている。植民地時代に本館であった建物の地下に政治犯の拘留施設が再現されていて、そこにはろう人形が置かれていて、音声のテープが流れている。当時の官憲の弾圧のすさまじさが展示されているわけです。

それはそれで、歴史博物館の主催者の意図が明瞭に表れている、そういう展示物なんです、その隣に獄舎、昔の獄舎が建っていて、そこは特に目立ったディスプレイもなくて、ひっそりとした感じなんですけど、私としては、む

しろ、そのろう人形のような施設よりも、その獄舎の方が非常に印象深かったという記憶があります。もともと当時の図面を見ると、三つの獄舎あって、矢印の矢のような形になっていたのが、そのうちのひとつの獄舎が無くなっている。ですから、くの字型、45度の角度で交わった二つの獄舎が残っている。そして、ちょうど、そのかなめのところを監視所があって、そこに監視員がいるようになっていて、それぞれの獄舎は二階建てで、廊下をはさんだ両側に独房の列が配置されている。ですから監視所のとこに立てば、一人の監視員がすべての独房を一遍に監視できるようになっている。そういう建物が今も残されています。その建物の内側全体が青白い色彩で、近未来のSF映画に出てくるような、そんな印象の建物です。

そういう獄舎の話はエッカート先生も直接引用されているフーコーの、あの『監獄の誕生』という本の中で、詳細に文章にされておりますが、まさに、囚人というのは、実際に監視所に人がいるいにかかわらず、常にいることを前提にしてしか行動できない、そういう設計というのが近代の獄舎の理念として設定されています。まさにそういう近代獄舎の理念的な姿と言えますか、典型的な姿を、西大門刑務所の獄舎に見いだすことができるのではないかと思います。

そういう意味で、独立運動家を拷問するという裸の露骨な暴力と、まさに近代の獄舎を理念とするような洗練され

た近代というものが、一つの場に併存している。そういう姿を、西大門刑務所に見出すことができたということで、私にとっては、非常に鮮烈な経験であったと思います。

刑務所だけではなくて、冒頭でお話しした学校の問題とあるとか、軍隊の問題であるとか、あるいは病院の問題というような、そういう規律権力にかかわるような論点があって、「植民地近代」研究のひとつの分野を構成しているというふうに言えるだろうと思います。

それともう一つは、日常生活や文化の問題に関する研究も盛んに行われて、特に京城、当時の京城における都市化の問題、あるいは消費の問題が、もうひとつの論点として出されているというように思われます。

一つつけ加えれば、ソウルに行かれた方はおわかりのように、清溪川という、一時高速道路建設によって暗渠になっていた川が再開発されて、文化コンテンツとして非常に強調されているんです。そういう流れの中で、ある種、一九二〇年・三〇代のソウルに対するノスタルジーのような、そういうような感覚も共有されつつあるように感じられます。

そういう状況の下、エッカート先生のご報告中では、サバルタン、つまり、日記を残すことができないようなサバルタンの研究というのが、徐々になされていかなければならないんじゃないかという指摘があったわけです。それとのかかわりで言えば、私なりにその辺は研究課題として共

